

平成二十四年（二〇二二年）九月二十八日 慰霊

神から人へ 人から神へ。

願いは巡り、巡りて戻る、その循環の願いなれ。

さにて本日、慰霊の仕方と心得を説き示さむ。

人は無念の想いのうちに、死を迎えるも多くあり。

なれば想いは消えることなく、その土地、事物、人心に、終世残りて留まらむ。

それら想いを解き放ち、あの世に帰るを促すが、慰霊の意味なり、心得なり。

御魂に感謝し、その死を悼み、慰めてやれ、労わりてやれ。

意味なき死など、さらになく、全てが後の 学びの糧なり。

さらによき方、望ましき方、靈性進化の 正しき方へと。

一つの命も 無駄なるはなし。

この世に生まれ、短き生を、瞬く間に終わりても、

御魂に刻みし 愛や哀しみ、喜び感謝の 記憶は永遠なり。

短きゆえに、尊く 清し。

人の代わりの犠牲となりて、命を失う使命なれ、その死は眩き 功とならむ。

残せし家族の 悲しみ嘆きも、全てを受け取り、あの世に帰れよ。

天界からの 守護を強めて、この世の家族を、友人 知人を、

後々までも 見守れよ。

慰霊は御魂を安らげて、恐怖や遺恨、悔恨、未連

断ち切れぬほどの煩惱を、きれいに浄化し、清めることなり。

命を落とせしその地にて、祈りの言霊 傾けてやれ。

清めの塩と、水と酒、あの世に飢えにて苦しめよう、少しの米も 供えるべし。

生ける命と 変わる事なし。

肉体滅び、消えるとも、体の記憶、感覚は、未だ変わらず、この世に残れる。

なればこそ、食事を供え、言霊捧げ、目をも耳をも 慰めてやれ。

落とせし命の 功を讃え、

使命を果たせしことに感謝し、

この世の者を 案ずることなく、

あの世に帰るを 祝いてやれよ。

この地に眠る 多くの御魂も、いつか この世の 執着鎮め、

軽く 自由な 御魂となりて、軛をはずし 羽ばたき行かむ。

流せし涙も 悲しみも 消せぬ未練も 思い出も、

慰霊を重ね 繰り返すうち、いつか 昇華し、浄化されむ。

死別の悲しみ、苦しみは、この世に生れば 宿命なり。

避けて通れぬ試練なれ、慰霊を通して、霊行 学べよ。さにて。